

ああ、児童文学

中島信子

このところ児童文学の作家を目指す人達の作品に、多数触れる機会が続いている。企業が社のイメージアップをいうことで賞を設けたり、地域が町興こし等を狙って企画したりで、その数は大変なものである。

「あら、これなら私にも書けそう」

「うん、うまくいけばプロになって名も出し、儲けられる」

と、賞金額も多いことから、書き手の層が主婦・学生・停年退職後の男性にも拡がってきている。これら賞の多くが、二十枚前後の低学年向き作品を謳っていることから、誰でもすぐ書けそうな気がするらしい。応募総数が三千編という賞もあり、今や児童文学花咲かりの観さえある。

しかし、応募作品の質の低下ははなはだし

い限りである。基本的な文章構成も学ばずテーマもなく、子どもの真の姿もとらえてない。安易な部分で児童文学の概念を理解したつもりになり、ただ子供っぽい文章をつくる。それでいながら、一作で作家になれるのではという魂胆がみえみえの作品ばかりだ。

大人の文学で賞に寄せられる原稿を読んだことがないので、その辺りの所は何とも言えないが、選評等から受ける印象では、ここま

で質が低くないようだ。こういつた児童文学を子供だましの文学と履違えた作品ばかりを読んでいると、「いいかげんにしないか、どこまで子供や児童文学をバカにするんだ」

と、つい喧嘩を売りたいくなる。例えばだが、(リカちゃんを林をとって、森をぬけお花

の咲きみだれる野原にきました。するととつぜん、ピンクのエプロンをしたクマのおかあさんが買物かごを手にしながらやってきて、リカちゃんにハチミツとミルクの味のするビスケットをくれました。リカちゃんは、ビスケットを食べると元気になって、歌を歌いながら家に帰りました)

と、いうようなものが、ファンタジー作品として寄せられてくる。二十枚という枚数の費しながら、リカちゃんがどういう性格の子なのか、なぜ遠い野原へ行ったのかさえ描けていない。五歳ぐらいだろうと思われる女の子が、ひとり林や森を歩いているのにはそれなりの訳があり、背景描写があつて当然なのだが、そんなことは考えもしないようだ。そして、エプロンのクマも何の脈絡もなく、

ただ唐突に登場してくる。もし、本当にエプロンをしたクマが立って歩いてきたとしたら、いくらクマの絵本に親しんでいる子供とはいえかなりの驚きがあるはずだ。なぜ、クマが登場する必要があるのか、そのプロセスがあつてこそ、物語は成立し、

「あらあ、クマさんこんにちわ」

と、なる。しかし、そこがなければ

「どひゃあ、た、たすけてえ」

となるだけである。ともかく、動物や植物を擬人化しさえすれば、ファンタジーと解釈する甘い作品がごろごろしている。

本来、フィクションであるならば、ファンタジーもリアリズムも根は同じである。描かれた内容を読者が納得してこそ、
「ああ、こんなクマがいたら本当に楽しくなるのに」

と、なるのだが、このあたりも何もわかっ
ておらず、どう読んでもあり得ないことがずらずらと並べたてられている。仮りにこのレベルの作品を子供が手にすることがあつただら、

「どこからクマさん来たの。どうやってクッキー焼いたの」

と、問いつめられるに違いない。しかも、

子供の目線というものも考えていないため、会話の文章はなおおそまつになる。

「あら、クマさん、ピンクのエプロンよくお似合ひよ。ブランドマークなのね。それとこのクッキーまるやかに舌にとろけて、あたしを夢心地にしてくれるわ」

もう一度。リカちゃんは五歳ぐらいである。母親の口ぐせを真似させるのだとしたら、そこを描いていなくてはならない。そこがないものだから、不気味な子供だよとなる。

書き手が四十歳だと四十歳代の、六十歳代だと六十歳代のそのままの会話を子供の会話として平気であてはめる。もっともこの現象は単行本として売られているものにもあり、作者と編集者の見識を疑うこともある。

また、何にでもおをつければ児童文学作品と思ふ傾向もある。これは賞への応募原稿より以上に推敲されているはずの同人誌にさえある。

「しつかりしたまえ、おパレードの作品など読みたくもない。子供と心をこめて二日つきあっておいで」

同人誌批評にはそう返事を書くが、応募作品にはそれも書けない。

(お日さまがしずむと、お月さまとお星さま

は暗いお空で、お歌を歌いだすのです)

等の作品はななめに読んで、あとはほうり出して、憂さをはらす。なにしろこういう作品ばかりと付きあっていると、目つきも悪くなる。こういった日本の児童文学(特に低学年向き)の質の低さは、プロと称する書き手と出版社にも大いに責任がある。出せば売れた時代に名がある人の作品だからといって質も考えず出版したり、少しでも話題性があればこれも質も検討せず出版してきた。その全体的な意識の低さが、そのまま世間の児童文学の通念となり、それが賞の応募作品等に現われているのだと思う。

正直、児童文学を書くことは大人の作品を書くことより難しい。子供の視点になるということは、時に背丈さえも縮めて物を見ることでもある。大人が何でもないことでも、子供には恐怖であり、またその逆もある。その辺りをつきつめていくと、決して安易な気持ちで児童文学は書けないはずである。子供は出会う作品によって、人生観を変えることがある。だからこそ文学の基本の文学なのである。

さて、そう自分に言いかけながら今日もまた、不気味な子供の会話と、おパレードの作品を読まねばならない。ああ、である。